

「風葉和歌集」評釈（二）

米田明美

前号（「中南園文」四四号 平成九年三月）に所載した
「風葉和歌集」評釈」の続きである。凡例については、
前号を参照していただきたい。

伊勢をの一条院の女三の宮

六春ながらまだふるとしのつららのみ結ばはれたる谷の下水

〔異同〕 神宮本一詞書として「題しらず」とある。

〔通釈〕 （前歌の詞書「題しらず」がかかっている）

春にもかかわらず、まだ旧年の氷ばかりが固く張っていて、
よく流れない谷の下水であることよ。

〔詞書語釈〕 ○、条院の女三の宮一、条院の第三皇女。

〔歌語釈〕 ○春ながら「ながら」は逆接の助詞。春であつても。春にもかかわらず。桜ちる花の所は春ながら雪ぞふりつつきえがてにする（古今集・春下・七五・そうく法師）○つらら一張り氷。つらいの意を掛けるか。○むすぼほる一結び合わせられて解きにくくなることから、固まって形になること。凝結する。氷が張る。心がふさがる、気持ちいが晴れないの意を掛けるか。○谷の下水一谷間の石や氷などの下を隠れて流れゆく水。いはせ山谷の下水うちしのび人のみぬまは流れてぞふる（伊勢集）○参考歌一朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつららのむすぼはれたる（源氏物語・木摘花）

〔物語〕 「伊勢を」―散逸物語。「風葉集」に六首(六・一五

八・二一七・三三三・五一八・一一〇)あるのみ、他に資料なし。小木喬氏(『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』)によると題名の由来は、「後撰集」(恋二・七一八・これまさの朝臣)の「女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとす すすか山いせをのあまのすて衣しほなれたり」と人やみるらん」に依るとする。題名からすると、「伊勢をの海人の捨て衣がいつも塩垂れるのように、涙にぬれて乾かず暇もない」女性を描いたものか。「後撰集」の詞書と内容とよく似た一一〇一歌の、左大将は形見にと単衣を式部卿の宮の中の君のもとに残し置くが、久しく訪れないので、中の君は薄につけて嘆きの歌をおくる場面が中心か。他に、出家する式部卿の宮三の君や、独り苦惱する一条院女三の宮、一条院の遊宴に侍する右衛門督が登場するが、詳細は不明である。

〔詠歌場面〕 「風葉集」の「題しらず」歌は、二種以上の區別があると考えられる。詠者が独り苦惱し、その胸中を吐露した場合と、その詠じられた物語場面が各部の範疇に入らず、部の配列と矛盾がみられる場合とである。(拙著『風葉和歌集』の構造に関する研究』平成八年)ここは詠

歌事情がはっきりしないが、「谷の下水」は、忍びたる思、秘めたる苦惱を暗喩することがあることから、前者の場合か。「つらら」「むすばほる」についても、(歌語釈)のように解釈すると、新しい年を迎え世間は華やいでいるのに、独り懊悩する女性の姿が浮かび上がる。

〔鑑賞〕 八代集では「つらら」を春の部に並べているのは、「金葉集」だけである。春になり「つらら」が解けるという趣向であるが、この歌は逆に春になったのにまだ残っているとし、次歌とともに春の訪れの中にも冬の姿を見い出している。冬から春への交替期の天象として配され、ゆっくりとした春の歩みを表しているよう。

小野このといふ所ところに住すみ給たまひけるころ、子この日に雪ゆきの降ふり
侍りければ

はしたかの女院

七 小松原こまつがはら霞かすみばかりやたなびかむ雪ゆきかきわくる人ひとしなければ

〔異同〕 なし。

〈通釈〉 小野という所に住んでおられた頃、子の日に雪が降

りましたので

小松の原では、春の霞だけがたなびいているだろうか。子の日というのに雪をかき分けて、小松を引きに来る人さえないので。

〈詞書語釈〉 ○小野―京都市左京区八瀬、大原一帯の古名を

指す。比叡山の麓。古くから多くの貴族の山荘があり、「古今集」「伊勢物語」に見える惟喬親王の閑居された地として有名である。「源氏物語」でも、六条御息所の山荘や浮舟を助けた尼の住まう地として記されている。○子の日―正月最初の子の日。この日に野に出て小松を引き、若菜を摘んでその若菜を食し、長寿を願った。○女院―院に準じた待遇を受け、基本的には、国母を条件にして授与される。正暦三(九九一)年東三条院詮子の女院授与に始まり、江戸末期に廃止さる。

〈歌語釈〉 ○小松原―「こ」は接頭語。松の群生している原。

子の日に小松を引く行事に掛けて、雪深い小野の地を表したのであろう。

〈物語〉 「はしたか」―散逸物語。「風葉集」に九首(七・一

七二・二九七・七三六・八六二・九七一・一〇六六・一一

七一・一一七)あるのみ。「はしたか」は、小型の鷹で鷹狩りに用いる。題名は、「拾遺集」(雑恋・一二三〇・よみ

人知らず)の「はしたかのとがへる山のしひしはのがへはすともきみはかへせじ」に依るか(樋口芳麻呂氏「王朝物語秀歌選上」)。「後撰集」(雑二・一一七一 よみ人し

らす)の「女のもとより怨みおこせて侍りける返事にわするとは怨みざらんはしたかのとかへる山のしひはもみぢず」の投影も認められるとする説もある。小木喬氏(同)

・神野藤昭夫氏(「散逸物語事典―鎌倉時代編」)「体系物語文学史(第五卷)」参考。「とかへる」は、鷹の羽が秋生

え変わることを言うが、はし鷹の羽がぬけかわってもあなたへの思いは変わらない、あなたを取り替えることはしないという意味か。内容は、女院は若いころ、一時小野に隠れ住んだことがあり、その行方を聞き知った三条院との再

会し、後女院はこの小野の地を訪ね、女房と花を眺めながら懐旧にふける。また別に、三条院の寵愛の衰え嘆く桐壺御息所の姿が描かれているが、その理由は分からない。

〈詠歌場面〉 「伊勢物語」八十三段の、小野に盤居された惟喬親王を雪の中訪ねた業平の詠じた「わすれては夢かとぞおもひきや雪ふみわけて君を見むとは」を踏まえると考え

られる。小木喬氏〔同〕参照。何らかの理由で小野に移り住んだが、気がつくとい今日は新春の子の日、業平のように雪をかき分けて訪れてくれる人もなく、小松の生い茂っている小松原は、ひっそりと霞だけがたなびいているのであろう—という女院の心情を示しているか。

〔鑑賞〕 前歌と同様、春の中にまだ残っている冬の姿を表しているが、この歌から十首「子の日」を表す歌群でまとまっている。最初に「小松を引く」歌四首が位置するが、この歌は雪中の小松で、まだだれも引いていない様子を示しているよう。

子の日に中宮のおほむ方へ檜破籠などたてまつると、
五葉の枝に移る鶯に

源氏の明石の上

八年月をまつにひかれてふる人につふ鶯の初音聞かせよ

御返し

九ひきわかれ年はふれども鶯の果立ちし松の根を忘れめや

〔異同〕 丹鶴本・京大本「おほむ方より」。『増訂風葉和歌集』に依ると狩野本・彰甲本（彰考館文庫蔵甲本）・嘉永

本（穂久邇文庫蔵嘉永元年写本）は、「おほむ方に」。

〔通釈〕 子の日に、中宮の御まし所へ檜破籠など差し上げる

ので、五葉の松の枝に移る鶯に歌を付けて

長い年月待つことに引かれて過ぎてきた私に、初子の今日、鶯よ初音を聞かせておくれ。

御返事

別れてから年月はたちましたが、鶯は果立った松の根を忘れることがありますようか。

〔詞書語釈〕 ○子の日―前歌参照。物語では、この年の元旦

は、子の日と重なっていた。○中宮―源氏と明石の上の姫君。葉の上に引き取られ、ここは完成したばかりの六条院に住む。「藤裏葉」の巻で入内、「御法」の巻で中宮になる。

○檜破籠―檜の薄板で作った破子（わりこ）。破子とは、食物などを入れるための蓋のついた箱。物語では、一鬚籠

中宮

ども、わりごなどたてまつれ給へり」とある。○五葉一五葉の松のこと。○明石の上―明石の入道と明石の尼の娘。源氏の妻の一人。「明石」の巻で源氏と逢い、「落標」の巻で姫君（後の中宮）を生む。明石の上は通称で、物語本文はこの名では記されていない。

〈歌語釈〉 ○まつ―「松」と年月を「待つ」の掛詞。「松」の縁語として「引かれ」。○ふる―「古」（年老いた）と「経る」（年月が経る）の掛詞。「ふる人」は詠者自身、つまり明石の上を指す。○初音―その年最初の鶯の声。ここは、「初子」（正月最初の子の目）を掛ける。松のうへになく鶯のこゑをこそはつねの目とはいふべかりけれ（拾遺集・春・二二・宮内卿）またこの「鶯の初音」は、明石の姫君の声（便り）を指す。○ひきわかれ年はふれども―明石の上と姫君は、別れて四年が経つ。○鶯の果立ちし松―「鶯」は詠者自身、つまり明石の姫君を示し、「松」は母である明石の上を指す。

〈物語〉 二歌参照。

〈詠歌場面〉 「初音」の巻。六条院完成後の最初の新春、今年は元日と子の日と重なった。源氏は明石の姫君を訪ねると、童女たちが小松を引いて遊んでいる。そこに明石の上

が姫君に、今日のために特に用意した破子とともに、五葉の松にとまっている鶯の細工ものに歌を付け贈ってきた。これに姫君が返歌を詠む。八歌は、この巻の巻名由来となった歌。

◎物語本文

姫君の御方に渡り給へれば、童、下仕へなど御前の山の小松引き遊ぶ。若き人の心ちどもをき所なく見ゆ。北のおとゞより、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、わりごなどたてまつれ給へり。えならぬ五えうの枝に移る鶯も思ふ心あらむかし。

年月をまつにひかれてふる人にけふ鶯の初音きかせよをとせぬ里の。

と聞こえたまへるを、げにあはれとおぼし知る。事忌もえしあへ給はぬけしき也。「此御返りはみづから聞こえ給へ。初音おしみ給ふべき方にもあらずかし」とて、御視取りまかなひ書かせ奉り給ふ。いとうつくしげにて、明暮れ見奉る人だに飽かず思ひきこゆる御ありさまを、いままでおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましう心ぐるし、とおぼす。

ひきわかれ年は経れども鶯の果立ちし松の根を忘れぬ

や

おさなき御心にまかせてくだぐしくぞあめる。

・「源氏物語」校異　ひわりこー高松宮家本(河内本系、

ひわりこともー麥生本(別本系)

〈鑑賞〉 「初音」の巻名の由来となる歌であるから、「子の

日」の歌群ではあるが、鶯の「初音」の意味を込めて置かれているのであろう。「初音」と「初子」がかけてある歌を並べている勅撰集は、〈歌語釈〉に記した「拾遺集」だけであるが、「初音」はだいたいの勅撰集にも採られている。一歌に今年初めて鶯の姿「初鶯」を配し、二歌に「春とつげくる鶯の声」とし、二五歌からの「鶯」の配列への繋ぎの働きとも考えられよう。

子の日に野に出でてよみ侍りける

しのぶもぢずりの右大臣

一〇 君が代をいとどものべに引く松は根さへぞ深きためしな
りける

〈異同〉 京大本「しのぶもぢずり」。

〈通釈〉 子の日に野辺に出て詠みました歌

我が君の御代をますます延ばすために野辺に出て引く子の日の小松は、根までも深く長く、良い手本となったことよ。

〈詞書解説〉 ○子の日一七歌参照。

〈歌解説〉 ○のべー「野辺」と「延べ」の掛詞。○松さへぞ

深きー子の日に引いた小松の根が深いことは、根が長いことで、寿命や御代が長くなることを喜ぶことにつながる。

〈物語〉 「しのぶもぢずり」ー散逸物語。「風葉集」に二首

(二〇・九九四)あるのみ、他に資料なし。小木氏(「同」)によると題名の由来は、「古今集」(恋四・七二四・河原左大臣)の「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに」(「伊勢物語」一段「みだれをめにし我になくに」)に依るとする。「千々に乱れた恋心」を意味するか。九九四歌が、いちずに愛した女が亡くなったが、人の娘として生まれた夢を見ろという詞書が記されているので、「浜松中納言物語」にみられる転生を盛り込んだ内容か。

〈詠歌場面〉 子の日に、右大臣が野辺に出て小松を引き、ただ今の帝の御代・長寿を願った歌を詠んだことしかわ

からない。

《鑑賞》 次歌とともに、御代の栄え、長寿を贊賀する意で並べられたものか。

題しらず

時雨の源大納言家の宰相

一一 君がため春の大野を占めれば千代のかたみに摘める若菜ぞ

《異同》 なし。

《通釈》 題しらず

我が君のために広い野原に、標を張って占有しておきましたので、御長寿を祝う記念となるような、籠に摘んだ若菜です。

《詞書語釈》

○題しらず―五歌参照。○源大納言家の宰相―源氏(皇族から臣籍に下り源氏姓を賜った者)の大納言家に仕える女房か。他の歌(三〇八・一三六〇・一三六九・一三九五)の詠者名に源大納言家の娘とあるので、娘に仕え

ていたか。

《歌語釈》 ○大野―広い野原。広大な原野。人遠い所で、自然のままであり、だれでも気がねなく立ち入ることができる。たまきはるうちのおほのうまなめてあさふますらむそのくさふかの(万葉集・卷一・四) ○占めれば―標を張って、君のために占有しておいたので。○かたみ―記念の品の「形見」と目の細かい竹で編んだ籠の「筐」の掛詞。ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみにつめるわかななりけり(新古今集・春上・一四・紀貫之) ○若菜摘む―正月の最初の子の日に、野に出て若菜を摘む。本来若い女が摘むもので、神事として行われたが、後新春の遊樂行事となった。

《物語》

「風葉集」に七首(一一・三〇八・三九二・一〇五六・一三六〇・一三六九・一三九五)ある。他に「和歌色葉」(建久九年一一九八年成立)巻三に「しぐれ」と物語名があるが、寛文五年刊行本であり、後世の付加とする説もある。石川徹氏『古代小説史稿』昭和三十三年)は「浜松中納言物語」の一文が「しぐれ」と関係あるかとされるが、反論(小木喬氏「同」)もある。題名は、三〇八歌によるか、或いは時雨の雨宿りという場面があってそれに由来

するか。内容は、中将これすけは、源大納言の娘と契りを交わすが、女は何らかの事情で小野に移り住む。中将は女が行方知らずになったのを嘆くが、物語の地で別の男と結ばれている女と再会し、密かに文を遺わす^一が読み取れる。

〔詠歌場面〕 小木氏〔同〕は、「源大納言家の女房の歌で、

若菜を贈るのにつけた歌である。祝の意味で、ことに「大野を占め」「千世の形見(象徴)」ということばから見ると、相手は皇室に関係ありそうだ。しかしこれだけでは、物語の筋とどう関係するか不明である。あるいは姫の後の夫(こと人)が、宮家であって、その胤による子供が生まれたとというようなことがあったかもしれない(ちよと木幡の姫君が式部卿宮、後の帝の御子を生むように)。しかしそれも憶測の域を出ない。」とされ、神野藤昭夫氏〔同〕は、「古今集」の「君がため春ののいでてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ」(春上・二二)を踏まえるかとされる。「風葉集」の現存部分では、皇室関係の人物は登場しないし、女も「源大納言の娘」が最終官職名であるならば、皇族と結ばれたとは思えない。また家の女房が、皇族に若菜を贈るのもどうか。歌に「君がため」「占め」とはあるが、「君がため」は恋人同志でも使うことからすると、ここは

源大納言家の女房が娘と男の仲を取り持った際の歌ではな
いだろうか。「題しらず」と記されているのもそのためか。
〔鑑賞〕 歌からすると、若菜の入った籠に歌をつけて贈った
と考えられる。相手が皇族かどうかは判断つかないが、配
列は御代を褒めたたえるよう並べられたか。

山里に住みけるころ、いとあやしき女どもの若菜摘む
を見て

はまゆふの兵衛

二二 霞たつ野辺の心もはづかしくないますらに若菜摘むら
ん

〔異同〕 「増訂風葉和歌集」に依ると竜大本(竜谷大学蔵本)
は、「山里に住み侍りけるころ」。

〔通釈〕 山里に住んでいたころ、とてもみすばらしい女達が、

若菜を摘むのを見て

霞たつ野辺もどう思ふか恥ずかしく、どうして今あらため
て若菜を摘むのでしょうか。

〈詞書語釈〉

○いとあやしき女ども一身分が卑しい女達。貴族からみた一般庶民のこと。ここでは、山里に住む女たちのことか。○若菜摘む一前歌参照。○兵衛一兵衛府に属した武官。「督」や「佐」の区別が記されていないところを見ると、単なる衛士か。

〈物語〉

「はまゆふ」一散逸物語。「風葉集」に二首(一一・一二・一三)あるのみ、他に資料なし。兵衛と宰相の娘が詠者名として登場するが、関係は分からず、詳細不明。題名は、「万葉集」(巻四・四九九・柿本人麻呂)の「みくまの

のうらのはまゆふもへなすころはおもへどただにあはぬかも」依るか(小木氏「同」)。「はまゆふ」(浜木綿)は、葉がため重なり合うので、幾重にも重なる意に用いられ、深い思いを表現するか(樋口氏「王朝物語秀歌選上」・神野藤氏「同」)。

〈詠歌場面〉

何かの理由で山里に住んでいた兵衛は、京の行事をまねて村の女たちが若菜を摘んでいるのを見て、戯れ言として詠んだ歌か。

〈鑑賞〉

一〇歌・一一歌が都で詠まれたのと対照的に、山里での若菜摘みの歌を置いたのか。

右大将仲忠うちにはさぶらひけるに、藤壺の女御、白銀の提子に若菜のあつもの入れて、黒方をふたにおほひて、取るところに女の若菜摘みたる形作りたるを遣はし侍りけるに、書きつけ侍りける

うつほの孫玉の君

一三 君がため春日の野辺の雪わけてけふの若菜をひとり摘みつる

〈異同〉

京大本「雪まわけ」(歌)。丹鶴本「かきつけける」(詞書)、「雪まわけ」(歌)。

〈通釈〉

右大将仲忠が宮中の帝の前でお仕えしていたところ、藤壺の女御が、白銀の提子に若菜の熱い吸い物を入れて、黒方という薫物を蓋のように作って覆い、蓋のつまみに女が若菜を摘んでいる人形を作ったのを遣わしなされたのに、書き付けました歌

あなたのために春日の野辺の雪間を分けて、今日この若菜をひとりで摘みました。

〈詞書語釈〉

○右大将仲忠一藤原兼雅が琴の音にひかれ、出

会った零落した女性（清原俊隆の娘）と一夜の契りを交わして生まれた子。主人公の一人。「蔵開上」の巻で中納言を兼ねた右大将に任せられ、物語最終官職も右大将である。○うちにさぶらひけるに―仲忠は、祖父俊隆や母の日記・歌集を持って参内し、帝に進講していた。○藤室の女御―源正頼と嵯峨院皇女の娘。正頼の九人目の姫君故、九の君あて宮と呼ばれ、多くの貴公子が求婚するが、東宮（朱雀帝）の妃となる。○白銀の提子―銀製のつるのある銚子。鉄瓶の形に似ている。○あつもの―熱い汁物。「和名抄」（飲食部菓菜類）に「羹 阿豆毛能」とある。○黒方―練香の一つ。沈・丁子・白檀・甲香・麝香・薫陸を調合し、練りあわせた薫物。○取るところ―蓋のつまみ。○孫王の君―藤室女御の女房。

《歌語釈》 ○春日―奈良県奈良市の地名。春日山の麓で、春日神社（三歌）・春日野がある。○参考歌―仁和のみかどみこにおはしましける時に、人にわかなたまひける御うた君がため春ののいでてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ（古今集・春上・二一・光孝天皇） 君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでつめる若菜ぞ（大和物語 一七

三段）

《物語》 三歌参照。

《詠歌場面》 「蔵開中」の巻。仲忠は、先祖の霊が守る京極邸の蔵を開け、祖父俊隆の日記や伝来の書籍を手に入れ、それを持って参内し、帝の前で四日間わたり進講する。途中藤室の女御が、酒や食物などを差し入れた折、白銀の提子に若菜摘みの人形を付け、孫王の君が歌を書き付けた。物語では、十二月十七日のことと推定される。

◎物語本文

集まりて、興じて、皆取り握ゑて参るほどに、大いなる白銀の提子に、若菜の羹一鍋、蓋には、黒方を、大いなるかはらけのやうに作り窪めて、覆ひたり。取り所には、女の一人若菜摘みたる形作りたり。それに、孫王の君の手して、かく書きたる、

「君がため春日の野辺の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる

羹をば、かくなむ仕うまつりなりにたる。聞こし召しつべしや」と書きつけて、小さき黄金の生繩を奉り、雉の足、折り物に高く盛りて添へ奉り給へり。

《鑑賞》 次歌とともに、「雪間の若菜」として並べられている。但しこの歌は、物語では十二月の場面であるが、歌内

容から選ばれたのであろう。

浮舟の方へ若菜遣はしけるに

源氏の小野の尼

一四 山里の雪間の若菜摘みはやしなほ生ひ先のたのまるかな

浮舟のきみ

一五 雪深き野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべき

〈異同〉 京大本「かへし」(二五歌詞書)。

〈通釈〉 浮舟の居る方へ若菜をお遣わしになったところ

山里の雪の中の若菜を摘んでもてはやしていると、やはりあなたの将米が期待されることですよ。

雪の深い野辺の若菜も今からは、あなたの御長寿のために米る年も米る年も摘みましょう。

〈詞書語釈〉 ○浮舟の方へ―出家した浮舟の居る部屋へ。○

小野の尼君―浮舟を助けた僧都の妹の尼君。上達部の北の方であったが、夫に先立たれ、一人娘まで亡くしたので出家し小野に住む。○浮舟―宇治の八の宮と八の宮の女房中将(八の宮の故北の方の姪)の娘。大君と中の君の異母妹。物語本文では浮舟と呼ばれておらず、「浮舟」の巻の、「橘の小鳥の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ」の歌により後に称された。

〈歌語釈〉 ○山里―浮舟と尼の住む小野の山里のこと。小野は七歌参照。○摘みはやし―摘んで賞美する。摘んでもてはやす。○生ひ先―将米。若菜を贈るのに付けた歌であるから、希望の意味を込める。○頼まるるかな―「るる」は自発。○雪深き野辺の若菜―雪深い小野の若菜のことであるが、裏の意としては春の気配すらないこの心憂き我が身つまり浮舟自身を指す。○年もつむべき―「つむ」は、若菜を「摘む」と年を「積む」を掛ける。あなたの長寿を重ねるために、何年も若菜を摘みましょう。○参考歌(一五歌)―君がため春ののいでてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ(古今集・春上・二二・光孝天皇)

〈物語〉 「源氏物語」―二歌参照。

〈詠歌場面〉 「手習」の巻。「年もかへりぬ。春のしるしも

見えず、こほりわたれる水の、音せぬさへ心細くて・・・」
と、新年の正月七日のことか。宇治川に身を投げた浮舟だ
が、助けられ小野の尼君のもとに身を寄せ、そこで出家す
る。新春尼君のもとへ若菜が届けられ、それを浮舟へ贈っ
た際の尼君と浮舟の贈答歌である。

◎物語本文

若菜を、おろそかなる籠に入れて、人のもて来たりける
を、尼君みて、

山里の雪まの若菜摘みはやしなほおひ先の頼まるるか
な

とて、こなたに奉れたまへりければ、

雪深き野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべ
き

とあるを、さぞおぼすらむ、とあはれなるにも、見るか
ひあるべき御さまと思はましかば、と、まめやかにうち
泣いたまふ。

〈鑑賞〉 一二歌からの「雪間の若菜」であるが、一四歌は

「摘みはやし」一五歌は、「君がためにぞ年もつむべき」と、
雪間の若菜を摘んで楽しみ、来年も摘みましょうと、摘ん
で後の意となる。

春日の歌の中に

うつほの左大将かずま

一六 見渡せば雪降る山もあるものを野辺の若菜の老ひにける

かな

右大将仲忠

一七 雪解くる春のわらびのもゆればや野辺の草木のけぶり出

づらむ

〈異同〉 京大本「左少将」(二六詞書)、「もゆれめや」。

〈通釈〉 春日神社で詠まれた歌の中に

見渡せばまだ雪の降る山もあるのに、野辺の若菜はもう老
いてしまったことよ。

雪が解けて春のわらびが萌え出たので、野辺の草木が芽吹
きけぶり始めたのであろうか。

〈詞書語釈〉 ○春日の歌―春日神社での歌という意で、三歌

の詞書と同じ物語場面であるから、略したのか。○左少将
かずまさー源正頼家の家司。あて宮の求婚者の一人の滋野
真智の長男。和正、和政の字を当てる。「藤原の君」の巻
で少将、物語では「かずさね」とする本もある。○右大将
仲忠ー二三歌参照。この「春日詣」の巻では、侍従。

〈歌語釈〉 ○若菜の老いー若菜がたけてきたこと。○わらびー
イノモトソウ科のシダ。山野に白生し、春地下茎から出る
葉は、端が巻いていて食用にする。煙りたちもゆとも見
えぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけむ(古今集・物
名・四五三・真せいほうし)と同様、「わらび」に「蕨」と
「薬火」(薬を燃やしてたく火)を掛け、「もゆれ」に「萌
ゆ」と「燃ゆ」を掛け、「けぶり」に「けふる」(新芽がで
る)と「煙」を掛けている。

〈物語〉 三歌参照。

〈詠歌場面〉 三歌参照。三八首中六首が「風葉集」に選歌さ
れ、春(上・下)の部には、五首(三・一六・一七・五三・
六〇)収めている。

◎物語本文

同じき少将和正、「冬若く春老ゆ」、

見渡せば雪降る山もあるものを野辺の若菜の老いにつ

るかな

・ ・ ・ (五首略) ・ ・ ・

侍従藤原仲忠、「蕨に消ゆる雪」、

雪解くる春のわらびのもゆればや野辺の草木のけぶり
出づらむ

〈鑑賞〉 一二歌から「雪間の若菜」を配し、一六歌でその若

菜の成長を「若菜の老い」として並べ、一七歌で「雪解く
る」「蕨明ゆ」としている。

六条院に渡り給へるに、雪降りける日、「心乱るるけ
さのあわ雪」と聞こえさせ給ひけるに

源氏の二品内親王

一八 はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあ
わ雪

〈異同〉 京大本・丹鶴本ー「給へりけるに」。

〈通釈〉 六条院にお輿入れなされて、雪の降った日、(源氏

が)「心乱るる今朝のあわ雪」と手紙を差し上げな

さったところ

頼りなくて空の上で消えてしまふでしょう、風に漂う春の
あわ雪のように。

〈詞書語釈〉 ○六条院―源氏、源氏の住まいが六条通りにあつたことからこう呼ばれる。○「心乱るけさのあわ雪」―女三の宮と結婚した源氏は、五日目の朝を迎え、昨日訪れなかつた由の手紙を女三の宮にしたためた。その歌の四・五句である。「なかみちをへだつる程はなけれども心乱るる今朝のあわ雪」○二品内親上―朱雀院の第三皇女。母君は藤童女御。「若菜上」の巻で源氏と結婚、「柏木」の巻で出家する。

◎「後百番歌合」七九番左 二品内親上

六条院にわたりたまひてのち院の御ふみに、なかみちをへだつることはなけれども心みだるるけさのあはゆき、と侍りける御かへし

◎「源氏物語歌合」二五番 女三宮（乙本）二品内親上。

詞書ほとんど同じ）

六条院より、心みだるるけさのあわ雪と、梅につけてきこえ給御かへし

〈歌語釈〉 ○うはの空―空の上の方と、物思いでばんやりし

た様子をつけている。○あわ雪―春さきに降る消えやすい雪。雪のすこしふる日、女につかはしける かつきえてそらにみだるるあはゆきは物思ふ人の心なりけり（後撰集・冬・四七九・藤原かげもと） 源氏の訪れなく、心細い我が身の心境をたとえた。

〈物語〉 二歌参照。

〈詠歌場面〉 「若菜上」の巻。「かくて二月の十よ日に、

朱雀院の姫みや、六条の院へ渡りたまふ」とあり、朱雀院の女三の宮は、源氏のもとに降嫁され二月に六条院に移られた。三日は女三の宮に通つたが、四日目は「今朝の雪で心地あやまりて」と訪れず、歌を贈る。（「心乱るけさのあわ雪」の歌） それに対する女三の宮の返歌である。

◎物語本文

はかなくてうはのそらにぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

御手、げにいと若く幼げなり。

〈鑑賞〉 前歌の「雪解くる」を受け、「春のあわ雪」が並べられた。

よそながらだにけ近きさまならばと思ふ人に遣はしけ

る

ひひこかしづくの頭中將

二九 霞だにへだてざりせば春の色をよそに見つともなぐさめ

てまし

〈異同〉 京大本「ひひこかしづく」。丹鶴本「ひひこか

しづく」。

〈通釈〉 遠く離れていても、せめて親しみのもてる様子であ

るならばと思う人に遣わした歌

霞さえ隔てていなかったら、うつくしい春の景色を遠くに
眺めながらも気を紛らわすことができたものを。

〈詞書解釈〉 ○け近きさまならばと思う人―親しみのもてる

様子、間柄であるならばと思う人。宮中に居る片思いの人
のことか。七二〇番歌の詞書に記す中宮のことか。

〈歌語釈〉 ○春の色―春の景色。春の様子。 題しらず 春

の色のいたりいたらぬさとはあらじさけるさかざる花の見
ゆらむ(古今集・春下・九三・よみ人しらず)

〈物語〉 「ひひこかしづく」―散逸物語。「風葉集」に二首

(二九・七二〇)のみ。「ひひこ」とは曾孫のこと。曾孫に

かしづくと言う題名か。七二〇番の詞書が「中宮の五十日

により侍りける」とし、詠者は内大臣であるので、内大臣

が曾孫の中宮にかしづく内容かとされるが(小木喬・神野

藤各氏)、不詳。

〈詠歌場面〉 詠者の頭中將が、宮中にいる人を持っている場

面か。「け近きさまなれば」とあり、片思いか。

〈鑑賞〉 この歌から二四歌まで「春霞」の小歌群。

心ならず小野に住みけるころ、男の久しく訪れ侍らざ

りければ、手習ひに

うき波の藤中納言女

二一〇 かがたにおぼつかなさもはれやらじ霞込めたる春の山

里。

〈異同〉 丹鶴本「はれやらで」。

〈通釈〉 不本意ながら小野に住んでいたころ、男がしばらく

訪れて来なかったので、手習ひに

あれやこれやと考えると不安で、気持ちも霞も晴れること
はあるまい。この霞の立ち込めている春の山里にいると。

《詞書語釈》 ○小野一七歌参照。○手習ひ一心に浮かぶ歌な
ど書き流すこと。手すきびに書くこと。

《歌語釈》 ○晴れやらじ一霞が「晴れる」と気持ちちが「はれ
る」が掛けてあり、不安もすっかりなくならず、また霞も
晴れない。

《物語》 「うき波」一散逸物語。「風葉集」に二七首(二〇・

一一六・一四三・一五四・一五五・九〇七・九一一・九一

二・九九九・一〇三九・一〇四〇・一〇四一・一〇四二・

一一二五・一一五一・一二六四・一三七〇)。「無名草子」

に、「また、隆信の作りたるとて、『うきなみ』とかやこそ、
殊のほか心にに入れて作りけるほど見えて、あはれに侍れ

ど、そも、などか言葉遣ひなど手づつげにて、いと心行き
ておぼえ侍らず」と、藤原隆信作と評している。隆信(一

一四二)(一二〇五)は、藤原為経(寂超)と藤原親忠女と
の間に生まれ、藤原定家の異母兄に当たり、「藤原隆信朝

臣集」等の歌集を残し、似絵(肖像画)の名手として名高
い。権中納言の歌が七首と多いことから主人公と思われ、

藤中納言女や帥宮の女、のち皇后になる女などの恋の遍歴

が語られるが、それぞれに思いは遂げながら不本意に終わ
る恋の顛末を主としたものか。題名は、「浮き波」に「憂

き」を掛け、海上を漂うような寄る辺のない憂き我が身と
いう意味か。物語中に、「うき波」の語を詠み込んだ歌が

あるか。成立時期については、樋口氏が「藤原隆信朝臣集」
にある定家との贈答歌や隆信の長歌から、永暦元年(一一
六〇)以降治承四年(一一八〇)以前、隆信一九歳から三九

歳までの間の作と推定されている。〔平安後白河時代散逸物語の研究〕

《詠歌場面》 自らの意志でなく、小野に隠れ住んでいた藤中

納言女に「この雪のきえざらん」と口約束するが、権中
納言が再び訪れたのは時鳥の鳴く頃であった。この二〇歌

は、年も改まり、霞が山里に立ち込めるようになっても姿
を見せない権中納言を思い、つれづれの日々の中であれや

これやと不安になり、募る憂愁を心に浮かぶままに書き付
けた歌であろう。権中納言と藤中納言女との恋の歌は、

「うき波」一七首中六首を占め、物語の主筋となると思わ
れるが、権中納言が熱心に通ったわけでもないようである。

《鑑賞》 山里に立ち込める霞であるが、二一・二二歌同様の
どかな春の景を詠じたのではない。